

《2022年2月（通算304回）公開サロン報告》

フットサルフェスタ 25年目の挑戦

—Africa Challenge とのコラボレーション—

【日時】2022年2月10日（木）19:30～21:00 ※終了後はオンライン懇親会（～23:00まで）

【会場】オンライン（Zoom）

【テーマ】フットサルフェスタ 25年目の挑戦—Africa Challenge とのコラボレーション

【演者】本多克己（NPOサロン2002 副理事長／神戸アスリートタウンクラブ理事長）

Africa Challenge プロジェクトメンバー

【コーディネーター】岸卓巨（NPOサロン2002 理事／一般社団法人 A-GOAL 代表）

【参加者（サロン2002 ファミリー）11名】★は NPO 会員

★安藤裕一（GMSS ヒューマンラボ）、★岸卓巨（NPOサロン2002 理事／一般社団法人 A-GOAL 代表理事）、北原由（高校サッカー指導者）、★小池靖（在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）、小松章一（東京都サッカー協会フットサル運営スタッフ）、★嶋崎雅規（NPOサロン2002 理事／国際武道大学）、★茅野英一（NPOサロン2002 監事／元大学教員）、★中塚義実（NPOサロン2002 理事長／筑波大学附属高校）、野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員／会社員）、★本多克己（NPOサロン2002 副理事長／神戸アスリートタウンクラブ理事長）、ほか1名

【参加者（サロン2002 ファミリー以外）20名】

阿部健二（合同会社 All Days Sports 代表社員／スポーツメンタルコーチ）、雨宮知子（CHEZA 共同代表）、天羽礼（筑波大学4年生）、内山貴之（JICA ウガンダ事務所所長）、大杉治英（JICA ウガンダ事務所企画調査員）、大場由太（SOLTILO UGANDA Ltd. 代表）、川崎芳勲（映像作家／元 JICA 海外協力隊ウガンダ）、櫛田一斗（Uganda Soltilo Bright Stars FC / サッカー選手）、重村のぞみ（特定非営利活動法人神戸アスリートタウンクラブ事務局）、棚原彩（Pa moja～スポーツウェアで繋がる Africa～代表）、半井真明（CHEZA 共同代表）、西村達衛（神戸アスリートタウンクラブ理事／大学スポーツマネジメント講師）、濱野大志（A-GOAL／同志社大学4年生）、Friday Mooya（CHEZA）、本田康弘（Dreamer 株式会社）、松田尚泰（Great Leap Consulting 株式会社代表）、ほか4名

【報告書作成者】守屋俊秀／荒波杏／岸卓巨

【目次】

1. コーディネーターより
2. フットサルフェスタとは
3. アフリカチャレンジとは
4. クロストーク「なぜアフリカなのか、なぜスポーツなのか」

【キーワード】

フットサル、U-18 フットサル、フットサルフェスタ、アフリカ、アフリカチャレンジ、Africa Challenge、A-GOAL、国際交流、SDGs、神戸アスリートタウンクラブ、岸卓巨、本多克己

1. コーディネーターより

中塚：サロン 2002 の理事長を務めます、中塚義実と申します。姿を見せられる方、可能でしたら見せて頂けないでしょうか。初参加の方も結構おられるようですね。私の本業は、高校の保健体育教師です。東京にある筑波大学附属高校に 35 年間、異動もなく勤めております。

主催のサロン 2002 は、2020 ではなく 2002 です。2002 年の FIFA ワールドカップ前から、「サッカー・スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げて、毎月一回、今日やっている月例サロンをやりながら、スポーツを取り巻くいろんな側面を取り上げています。今日で通算 304 回となります。ただ集まるだけでなく、何らかの事業に取り組もうということで、2014 年度に特定非営利活動法人となり、さまざまな事業に取り組んでいます。

本日紹介される事例はサロン 2002 主催事業ではありませんが、フットサルフェスタ主催団体の本多克己さんはサロン 2002 の副理事長として、U-18 フットサルなどさまざまな事業に取り組んでおられます。A-GOAL の岸卓巨さんもサロン 2002 の理事、あるいは事務局長として、長い間ささえてくれた方です。このようにメンバー一人ひとりが意欲的に取り組み、それをみんなで共有するのもこのネットワークの楽しいところです。3 月になれば 2022 年度の新規会員募集を致しますので、なんか面白そうだなと思ったら是非、これからも繋がりを保てればと思います。

ということでさっそくコーディネーターに繋いでいきたいのですが、いくつか約束事をさせていただきます。すでにレコーディングさせてもらっていますが、映像を公開することはありませんのでご安心ください。レコーディングデータを元にして報告書を作成します。NPO サロン 2002 のオフィシャルサイトで公開します。発言された方には内容チェックのご協力をいただくことがあると思いますのでよろしく願います。

ではコーディネーターの岸さん、よろしくお願いします。

岸：はい、本日はご参加いただきましてありがとうございます。サロン 2002 では事務局長を今季までやらせていただいております。その他 A-GOAL という団体を自分でやっております。今日は私がコーディネーターで、メインで本多さんに演者という形でお話をいただく予定です。初め、本多さんから簡単に自己紹介いただいてもよろしいですか？

本多：サロン 2002 副理事長の本多です。今回フットサルフェスタという大会をテーマに取り上げていただきましたが、大会を主催している神戸アスリートタウンクラブという NPO で理事長をやっております。よろしくお願いします。

岸：よろしくお願いします。本来参加者の皆さんにも自己紹介をしていただきたいのですが、27 人もいらっしゃいまして、皆さんで自己紹介しているとそれだけでかなり時間が経ってしまうので、アンケートを取ります。ところで、フライデーさん、ハウアーユー？

フライデー：アイムグッド、サンキュー。日本語でも大丈夫です。

岸：ありがとうございます。では日本語で行きます。サロン 2002 の月例会、今回 304 回ですけども、初参加という方、手を上げていただいてよろしいですか？なるほど。半分ぐらいが初めて。はい、ありがとうございます。

次の質問ですけども、今回のテーマがフットサルフェスタということで、フットサルフェスタについて、今回の公開サロン、あるいは 12 月に行った時に初めて知ったという方はどれくらいいらっしゃ

やいますか？ありがとうございます。初めての方が多くですね。実は25周年ということで、その辺の歴史も本多さんからお話いただければと思います。

もう一つ、最後の質問ですけれども、アフリカとの関わりについて皆さんにうかがえればと思います。アフリカに行ったことがある方は？ それなりに居るのかな？ ちなみに今日、アフリカから参加してくださっている方がいます。JICAの内山さん、JICA ウガンダ事務所の内山さん、よろしくお願ひします。

では内容に入って行きたいと思います。「フットサルフェスタ 25年目の挑戦ーアフリカチャレンジとのコラボレーション」ということで行わせていただきます。

今日の目的ですけれど、フットサルフェスタのビジョン、ミッションを知るところが一つ目。二つ目は、アフリカチャレンジという企画を実施したので、その意義の確認が出来たらと思います。今日は12月に行われたフットサルフェスタのアフリカチャレンジで、運営に携わってくださった皆さんも参加しているので、ある意味公開反省会みたいな感じもあります。三つ目が、今後に向けた改善策の検討です。フットサルフェスタも、アフリカチャレンジも、です。また、ほかのスポーツイベントやアフリカとの交流など、次につながる場になればと思っております。よろしくお願ひします。

タイムテーブルとしては、初めに本多さんからフットサルフェスタ 2021 の紹介をしていただいた後で、アフリカチャレンジを紹介させていただきます。その後はクロストーク。アフリカチャレンジに関わっていただいた方やフットサルフェスタの運営メンバーを中心にクロストーク。最後に皆さんからの質疑応答も受けて、全部で90分、21時までお付き合い頂ければと思います。適宜チャットで質問とかコメントを寄せていただければと思いますので、よろしくお願ひいたします。

では本多さん、フットサルフェスタのところをお話いただけますでしょうか。

2. フットサルフェスタとは

1) フットサルフェスティバルのあゆみ

本多：フットサルフェスタっていうよりも、おそらくフットサル関係者にとってはホンダカップ、ニッポンハムカップの方がなじみがいい。もともと1997年に、フットサルという競技、5人制のサッカーがございまして、まだまだ人気は低かったところからスタートしています。

日本ハムがスポンサーになってくれて、スタートの段階ではセレッソ大阪杯という名前で、関西でスタートしました。その後名称変更をしてニッポンハムカップとなって全国展開しました。

2008年、ここから車のホンダ、本多さんの本多ですよと間違われたりしてはいたんですけども、本田技研工業がスポンサーになってくれました。最初の3年間はそのFCバルセロナ、真ん中のイラストを見ていただくとバルサのユニフォームを着ているんですけども、FCバルセロナがサポートしてくれて、大会を実施することが出来ました。大会は7分ハーフでやっているの、本当にお遊びみたいな大会で、本格的にフットサルをやっている人にとっては、ちょっとカジュアルすぎるかなという意識は持っていました。けれど、大会やっていると、やはりフットサルの全国大会が少ないので、この大会を一年の目標にやってくれている人がたくさんいるということが分かって来た。今に至るまで、これはやめられへんな、こんな人がいてくれるのであれば、続けて行かなあかんということで、25年間もやってきています。僕にとっても何かライフワークみたいなことになっているという大会です。

誰もが主役になれる晴れ舞台と書いています。例えば野球とかサッカーとかで、大人になって全国大会、日本一を目指すというのはなかなか難しいかもしれないですけども、フットサルだと大会ごとチームを組んで出場したりすることが出来る。誰でも、年間登録とか、日常的なチーム活動とかなしで日本一を目指せる場所ということが大会の一番大きな価値ではないかなと考えています。

民間施設が協会・連盟よりも早いスピードで拡大したため、「大会」へのニーズが高まるなかでの誕生となっています。大会が少なかったので、全国大会ができてありがたい、という声を皆さんからいただきました。それをずっとやっているうちに、サッカー協会の全国大会もしっかりと整備され、さらにはリーグ戦とか、いろんなカテゴリーの大会ができてきました。だから、この大会としてもいろんな新しい意義・価値を探して行く必要があるところではあります。

右下の方に、U-18、U-18 女子とありますが、これは日本サッカー協会の中でも一番整備が遅れたところで全国大会がなかったんですけど、大会をやっていると、予選大会が終わるごとに高3の先輩を囲んで3年間ありがとうございましたというようなシーンがずっと見られるようになってきました。大会の価値を改めて知らされたと感じました。U-18、高校生男子の大会を作ったら、次は中塚さんが顧問をやっている筑波大学附属高校の女子のフットサルチームが、出てきては、女子のカテゴリーで、いつもボコボコに負けて、目を潤ませながら帰っていく姿を見ながら、女子高生カテゴリーも必要かなということで作りました。今ではたくさんさんのチームが参加するカテゴリーになっています。

7分ハーフの試合を1日3試合やってもらうので、自分に合ったカテゴリーでどんなレベルの人でも参加でき、楽しんでいただくというのが一番大きな価値かと思っています。とはいえ、日本サッカー協会（JFA）からしっかりと後援していただいているオフィシャル性の高い大会でもあります。今年からグリーンアリーナ神戸に会場を移して全国大会を行っています。これまでは、いまフットサルの聖地と言われている名古屋オーシャンアリーナでずっと全国大会をやってきました。これも一つ、大会の格付け、価値に繋がってきたのかなと感じています。先ほども言いましたが、U-18、U-12世代の女子の全国大会はこの大会だけということで、皆さんの目標にいただいている大会になります。

また、1997年からスタートということで、ちょうどインターネットが普及し始めたタイミングでもあります。ですので、ネットとの親和性の高い大会になってきていると思います。サロン2002の運営・運用とも重なるところがあるのですが、割と早い段階からネットとの親和性を持ってやってきて、それを一つの強みと、私たちは考えていたんですけども、逆にそれができていたことで、SNSなどへの対応はちょっと遅れてしまったという反省もあります。今年は、先ほど皆さんにご覧いただいたような動画配信などを新しく試みっていますが、この辺りはまた若い皆さんのご意見をいただいて、今後どうしていくべきか考えていきたいと思っています。

日本代表も多数輩出ということで、今の日本代表選手がこれまでたくさん参加してくれています。また、元Jリーガー・元サッカー日本代表の選手がオーバー45とかのカテゴリーで参加しています。

25年間、時代に対応しながら成長してきました。ただ、今はもうたくさんさんのフットサル大会があります。その中でこのフットサルフェスタはどうあるべきなのかということを考える必要がある、ということで今回の取り組みに至っています。

2) 新たな価値の創出ーアフリカチャレンジとのコラボへ

本多：まず僕たちが考えた大会の価値は、この大会が、大会ごとにチームをつくって出場することが可能な形態でやっていますので、チームのコミュニティ、単なるスポーツに勝つための競技だけではなく、コミュニティをつくっていく、コミュニティを活性化して行く装置になっているんだと感じています。いまコロナの中で、そういったコミュニティ、人との繋がりが失われている中で、もう一度そこに取り組みたい。大袈裟に「プラットフォーム」と書いていますけれども、色々な方、スポンサー参加者、ここで問題解決に、社会課題の解決に取り組んでいただく場所。友達と一緒に改めて体を動かす、そういった形を何か考えたいと思っています。という事です。

岸さんに相談する際に、まず僕が最初に考えていたのが、アフリカに対するドネーションということです。「Goal for the world!」と書いていますけれども、ワンゴールワンコインですね。ゴールを決

めたらその人は百円払ってください、ドネーションしてください、寄付をしてくださいという事です。それに対応して、スポンサー企業からも同じ額の寄付を頂いて、それをアフリカに送りましょう。そうしてもらうことで、ゴールを決めた方、ドネーションをいただいた方には、何かスポンサーからの記念品をプレゼントしますというようなことを考えていました。けれども、A-GOALの皆さん、今回一緒に活動していただいた CHEZA の皆さんと話をしていくうちに、どうもそうじゃないなということで、「AFRICA CHALLENGE」ということに到達しました。岸さんをはじめ周りにアフリカとの関わりを持っている方がたくさんいらっしゃるんですけども、僕自身は今まで、アフリカ支援・アフリカとの交流というところに特に積極的に関わってきたわけではありませんでした。改めて、フットサルとアフリカ、スポーツとアフリカ、「なんでフットサルフェスタでアフリカなん？」というところを自分自身しっかり構築しないといけないな、人に説明できるようにならないといけないなと思っています。大会の会場でも、終わった後の懇親会でも、皆さんに「なんでみんなアフリカなん？」っていう質問を投げかけさせていただいたんですけども、今日のこのサロンを含めてしっかりと構築して、自分でも100%納得して広げていきたいなと思っています。そうすることで、この大会だけではなくて、アフリカと日本・世界がどうあるべきなのかというようなことがもう一度色々な視点から確認できるような、そういう場にもなっていくのではないかなというふうに考えています。

岸：ありがとうございます。フットサルフェスタについて質問とかあれば、是非チャットの方に入れて頂ければと思いますし、何人かお話の中でも出てきた方もいらっしゃるので、中塚先生・サロン理事長、フットサルフェスタへの想いというか、歴史的なところで何か今の補足とかコメントあればお願いします。

中塚：サロン 2002 関係者でフットサルに携わっている方は、実は大勢います。本多さんはもちろんですが、今日もいらしていますが、東京都サッカー協会がフットサルの大会運営に携わっておられる小松さんとか、実はいっぱいおられるんです。フットサル絡みの話は耳にいろいろ入ってくるんですが、本多さんがこの大会をずっとやっておられるのは知ってはいましたが、その正体が何かというのは断片的にしか知らなくて、今日の話で初めて全貌を理解しました。うちの生徒たちも参加させてもらっている大会です。「お前ら何の大会に出たん？」って聞くと、「ホンダカップ」とだけ言って、「それ何？」と。それは僕は知ってるんですけど、生徒たちが参加する「ホンダカップ」と、本多さんがやっている大会がなかなかつながってこなかったというのが正直なところかもしれません。

フットサルに携わる方はご存じだろうと思いますが、日本協会、あるいはフットサル連盟でオフィシャル大会を少しずつ整備し、いろんなカテゴリー、年代に広げていくことをやっています。しかしその流れに乗ってこない人たちもいるんですね。そういう人たちが目標にできる、協会主催大会よりも手軽に参加できる、そういうとっつきやすい大会が求められるし、民間大会はこうあるべきということを示してくれているのではないかと感じていきます。

たまたま12月大会最終日に、タイミングよく神戸の会場に来ることができました。この大会は初観戦です。ちょっとですけどね。するとアフリカ人が来ていて何やらやっている。まさにいま本多さんの問いにあったとおり、「フットサルでなんでアフリカなの？」と、いまのところ「？」のままですので、このあとの意見交換で理解できればと思います。

岸：ありがとうございます。もう一人、お伺いしたいなと思います。西村さん、一言コメントいただけますでしょうか？

西村：神戸アスリートタウンクラブで、本多理事長の下でお手伝いをしている西村と言います。実は本多理事長の中学・高校のサッカー部では僕の方が先輩で、ホンダカップができた時には、本多理事長は僕の会社の社員だったというところで、いつの間にか立場が逆転しているんです。本多理事長が僕の会社から独立するときに、フットサルをやりたいということで、フットサルは全部本多理事長が管轄するようになったんです。僕はさっき中塚先生のお話にもありましたけれども、「カジュアルの領域ではすごい伸びているのに、いまいちちゃんとせん一、フットサル界」、みたいなことを思っていました。僕もちらちらとしか本多理事長が頑張っているのを見てなかったんですけども、日本ハムカップがあって、ホンダカップの冠がついていない時期もあって、いまも実は冠は付いてない時期だと思います。そんな中でも自分で苦勞をしたり、お金がマイナスになっても本多理事長が頑張っているのを見ています。さっきも話がありましたけども、先輩後輩がいてどうのこうのというところを見て、「あー続けているのはそんなところにあつたんやな」というのは、改めて感じているところです。フットサルの周りには熱い人たちがたくさんいるんだから、もうちょっとフットサルどうにかならんのかなとか思ったりはしています。以上です。

岸：ありがとうございます。

ではここで、フットサルフェスタの実際の様子を見ていただければと思います。

フットサルフェスタ 2021 での Africa Challenge

<https://www.youtube.com/watch?v=HICUCQGVDlg&t=140s>

岸：この映像を撮影・制作いただいた川崎さんが本日参加してくださっていますので、大会の感想を一言お願いします。

川崎：皆さんこんばんは。今回のフットサルフェスタ、アフリカチャレンジの記念すべき第一回目の映像撮影をさせていただきました、川崎義博と申します。感想、そうですね。冒頭の中塚さんのお話にもあったかもしれませんが、フットサルフェスタとアフリカチャレンジ、なぜ同じ場所でやるのか？ その意義はどこかっていう落としどころを映像でどう作っていくかというところは、私自身すごく悩みました。けれども、純粹無垢にプレーする選手たち、盛り上がっている会場の熱気と、アフリカチャレンジのスポーツを通じて社会課題に取り組んでいく、その姿勢の融合というのは、ほかのスポーツイベントではなかなかないものなんじゃないかなと思いつつ作成していました。なので、今後継続していくにあたって、映像制作者・撮影側からすると、伝わりやすい見せ方、伝えやすい目標設定ですとか、その辺を固めていくことができればと思います。今回のミーティングの最後の方に言えればと考えていたことですが、もっと多くの人からの理解・サポートが得られるのではないかと思います。でも第一回目としてはすごいまとまりの良いものにできたのではないかなと個人的には思っています。ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。素敵な映像ありがとうございます。そうしましたら、今アフリカチャレンジ、アフリカチャレンジって言っていましたが、アフリカチャレンジとはなんぞやっていったところから話をさせていただきます。

3. アフリカチャレンジとは

岸 : アフリカチャレンジとはということで、アフリカ×スポーツというのが大きなテーマとしてあります。実際にやっていることは、運動能力測定を通じたアフリカ交流プログラムというところですね。画面の一番下にも「これまでにない国際協力・国際交流の形を」ということを掲げています。スポーツの国際協力というと、スポーツ用具を途上国に送ったり、あるいはコロナがなければ実際に一緒にプレイしてということが一般的な国際協力や国際交流の形かなと思います。けれども、このコロナ渦ということもあり、あるいは今までにはない形でアフリカと繋がるということで、コンセプトとして、「アフリカは、支援する相手ではなく、挑戦する相手だ」というようなキーワードでこの活動をやっております。

初めましての方もいらっしゃるんで、なぜ本多さんが私のところにはじめに声をかけてくださったのかというところを少しお話しします。私自身は、一般社団法人 A-GOAL という団体を自分でやっております。一昨年、2020年5月に始めまして、去年6月に法人化した、まだ新しい団体です。スポーツでアフリカと日本をつなぎ、持続可能な社会を築くということをテーマにやっております。実際はいろんな形でスポーツとアフリカを絡めながら SDGs 達成に貢献するってということで、例えばコロナで生活に困った家庭への食糧支援だったり、Jリーグの YSCC さんという J3 のクラブと連携してサッカーボールを現地に届けたりということもします。また、ホームゲームでサポーターの方とアフリカをつなぐような企画をやったりしていいです。いま 30 人ぐらいのプロジェクトメンバーと、80 人ぐらいのサポーターの皆さんがいらっしゃるんですけども、アフリカ各国、こういった国と繋がりを持ちながら、それぞれの国でスポーツイベントをやったり、スポーツクラブを通じた食料支援をやったりということをやっています。これを一つひとつ話していると長くなり、これだけで一時間は話せるのでこのぐらいにしますが、こういった形でアフリカの活動をしています。それがあって、本多さんに、お声掛けをいただきました。

今回、どういうことをやろうかと考え、実際に神戸の会場で実施した活動は、この五つです。これらをまとめて「アフリカチャレンジ」と言っています。一つ目は、アフリカの交流相手・国の紹介ということで、今回主な対象国はウガンダだったんですけども、ウガンダの紹介だったり、今回交流する相手の紹介、相手クラブの紹介です。二つ目が、実際にウガンダでも日本でやるものと同じ運動能力テストをして、それをランキング形式で、日本の記録と競い合うものです。三つ目がリアルタイムでの中継ということで、本当に例えば、ケニアとカルワンダと時差が 6~7 時間ですけども、実際につないでみて、ヨーイドンで耐久腕立て伏せをしてみたりということ zoom でつないでやりました。四番目、今日も参加して下さっているフライデーさんは、日本にいらっしゃるザンビアの方ですが、在日アフリカ人によるプログラム運営ということで、実際に運営に参加していただきました。この写真を撮っている子たちは、ランキングでアフリカのかなり上位に行きまして、その記念写真を撮っているシーンですね。五番目は、ウガンダの子供たちで、実際にリアルタイムで伝えたい子供たちです。時差的に朝の時間だったんですけども、その日の朝ごはんはこちらから提供させていただきました。この団体はエイズの支援をしている団体で、そんなに裕福でもない状況の中で、お腹を空かしてスポーツするより、一緒にご飯を食べてから一緒にやろうよってということもあって、交流相手へのサポートということをしました。こんな形で、同じアスリートの仲間として、アフリカを感じられる場ということで、アフリカチャレンジを実施させていただきました。

実際にどんなところと勝負をしたかということをご紹介させていただきます。一つ目が SOLTILO Bright Stars というクラブです。大場さんに振った方がいいかなと思うので、大場さん、せっかくなので簡単に Bright Stars のご紹介いただいてもいいですか？

大場：はい、皆さんこんばんは。初めての方には、はじめまして。SOLTILO Bright Stars FC というサッカークラブ、プロサッカークラブを運営しているジェネラルマネージャーの大場由太と申します。本日はよろしくお願いいたします。冒頭から本多という名前がありましたけど、私たちのクラブは、ホンダでも圭佑本田がオーナーを務めているクラブになります。いまスライド左側に写っているのが我々のクラブのロゴになっておりまして、ウガンダのプロサッカークラブを運営し始めて4年になります。本社は、大阪の吹田にあるんですけども、私が二代目のGMということですよ。

SOLTILO は、本田圭佑が元々ウガンダに渡航した際に、恵まれない子供たちだったり、南スーダンからの難民の子供達とサッカーをするとき、サッカーを通して彼らに対して夢や希望を与えることができないかという想いのもとで、クラブ経営を始めたものです。なかなか難しいところがあったりうまくいかない部分もある一方で、やりがいもあります。今回も出てもらっている日本人の榎田選手もいます。人材交流を通しながら、他のクラブができない価値というものを私たちが提供して行きながら、少しずつウガンダの子供達のためになるにクラブづくり、夢や希望を与えられるクラブづくりを目指しております。本日はよろしくお願いいたします。

岸：大場さんありがとうございます。実際現地で、測定したところの映像があるので、ご覧頂ければと思います。

Sports Performance Test at SOLTILO Bright Stars FC

<https://www.youtube.com/watch?v=MQFSpKWMAts&t=3s>

日本と同じ種目をやっています。長座体前屈だったり片足立ちだったり、プランクっていう耐久種目をしました。日本でもフットサル会場の神戸グリーンアリーナで実施しました。実際にウガンダで撮影している時には、現場にいらっしゃった榎田さん、簡単に自己紹介と、実際向こうでこれやっていくときどんな雰囲気だったかを教えていただけますか？

榎田：はい、今シーズンからウガンダの SOLTILO Bright Stars で選手としてプレーしています。昨年の6月からで、今シーズンの半分って感じですかね。5月月末ぐらいまでシーズンがあるので、プレーをしています。見てもらったらわかりますけど、結構アバウトというかざっくりな感じです。でも選手たちは結構こういうイベントとかも協力的で、みんな真剣に協力してやってくれます。

岸：ありがとうございます。ご協力いただきましてありがとうございました。榎田さんのプロフィールもこんな感じで、結構いろんな国でサッカーされてきたんですね。

榎田：はい。僕はタイとオーストラリアと、日本でも J3 で一年やっていました。

岸：はい、ありがとうございます。ウガンダは、一言でいうとどんな国ですか？

榎田：やっぱりまだまだ環境とかが整ってなくて、いろいろ難しい面もあるとは感じます。

岸：なるほど。ありがとうございます。また後ほどよろしくお願います。

今回実際にリアルタイムで交流したのは UGANDA EMPOWERS という団体です。

浜野さん、この団体をご紹介いただけますか？

浜野：わかりました。皆さんこんばんは。浜野と申します。今は関西の同志社大学に通っている4年生です。A-GOALでは学生メンバーとして活動しています。昨年の夏、8～9月の一ヶ月半ほどウガンダに滞在し、NGO UGANDA EMPOWERS でボランティア活動しておりました。UGANDA EMPOWERS という団体は全員ウガンダ人で運営されていて、代表のジョンボスコさんが、幼い頃は体が弱かったこともあって、周囲のエイズ患者、HIV エイズの患者の方をみて、そういう方を減らそうということで始められた団体です。今年で11年目だと思います。色々な活動をされているんですけども、チャリティー活動の一環として、スポーツイベントもたくさん開かれていて、僕が滞在中一緒にサッカークラブをジョンボスコさんと作らせていただいて、僕は帰国後、そのサッカークラブの練習を、日本からではありますが、サポートしています。今回は、その現地のサッカークラブと、このフットサルフェスタのアフリカチャレンジのイベントとを繋がせていただきました。

岸：ありがとうございます。これは終わった後に現地で、子供たちがやってみてどうだったかな？みたいな感想を言っているところです。

彼女は女の子ですけど、そんな子たちも一緒にプレイしているっていう事ですね。

実際、記録を争いまして、その結果は終わったあとも見られるように、CHEZAさんのホームページに載っています。プロアジリティ、敏捷性のところで、ウガンダが1位、2位をキープしています。握力はフライデーさんがダントツの1位。ザンビア人ですね。

フライデーさんこんにちは。フライデーさんちょっとだけ自己紹介していただけますか？

フライデー：皆さんこんばんは。はじめまして。フライデーと申します。出身はザンビアです。6年ぐらい日本にいます。最初、山梨学院大学に通って、大学を卒業してから関西学院大学のMBAに通っています。こういうイベントをどのように知ったかという、CHEZAさんでアルバイトしていたことがきっかけです。どうぞよろしくお願いします。

岸：フライデーさんありがとうございます。すごい握力の持ち主が自己紹介してくださいました。そんなフライデーさん、今日はフライデーじゃないですねが、そんな形で終わってからも、ランキングは見られるようになっています。

スライドに戻ります。CHEZAさん自己紹介よろしくお願いします。

半井：合同会社CHEZAとして活動しています半井と申します。よろしく申し上げます。もう一人出席しています、雨宮といいます。私たち自身は元々アフリカに滞在していた経験がありまして、JICAさんとか、world bankとかそういったところの仕事をさせていただいております。一昨年日本に帰ってきて、スポーツを通して現地の方と繋いだりする取り組みをしています。アフリカチャレンジにはスポーツコンテンツを提供させていただくというような立場で参加させていただきました。

冒頭から色々皆さんがお話しされている中で、やっぱり今日の一つのテーマだと私自身思っているのが、「なぜ、アフリカなのか？」っていうところです。それはやっぱり明確に伝えることができるといようなことは、確かに運営している時も感じることはありました。

私を感じていることを簡単にお話させていただきます。ぶっちゃけて言うと、必ずしもアフリカでなくてもいいのかもしれないとは思っています。スポーツという切り口で語るときにも、スポーツが必ずしもフットサルとかサッカーじゃなくてもいいのかもしれませんが、今回このフットサルの大会の中で、アフリカというものをテーマに扱ったことで見えて来たものの一つは、やはりサッカー・フットサルをしに来られた方が、本当に自然体で入ってきて、アフリカに触れることができたというのが事実だと思います。本多さんの言葉をお借りすれば、「新しいコミュニティを作ること

が、新しい体験を作る」ということが、今回アフリカチャレンジが提供できたものだと思いますね。それがアフリカを知るところで止まってしまって、あまり具体的な、現地が見える様子っていうものをこちらが提供することができていなかったのも、もしかするとそれが課題であるかも知れません。もっと言えば、今回は運動能力っていうスポーツの指標を使いましたが、そういう数字を使って見せるのも一つの方法ですし、それと同時並行的に、現地にいる方のストーリーであるとか、あるいは会場に来てくれているフライデーさんの持っているストーリーというものを提供することができれば、本当に新しい体験になって参加者に伝わっていくんじゃないかなと思いますね。

このようにいろいろ話をされていて、私が本当に思うのは、アフリカにいた人間とそうでない人間の間に温度差があって、その全体的な温度差は、ストーリーを思っているかどうかだと思うんです。ですから、そういったストーリーを、会場にいる方に伝えることができれば、スポーツイベントの新しい価値として提供できるんじゃないかなと個人的に考えていました。

岸：ありがとうございました。実際アフリカチャレンジフットサルフェスタはどんな感じでやったかという、12月18～19日に、100名以上の方に参加していただきました。5種目実施し、神戸アスリートタウンクラブとの協働という形でやりました。チャレンジする相手は、本田圭佑選手のプライドスターズと、あとはウガンダ、ケニアにもビデオ通話をつないでリアルタイムでの交流を実施しました。あとは株式会社ラウディというケニアのお茶を作っている会社、輸入している会社ですね、からケニア産のお茶、紫茶っていうお茶を提供いただき、それを参加賞として提供させていただきました。ということで、こんな形で、アフリカチャレンジ実施しました。

4. クロストーク「なぜアフリカなのか、なぜスポーツなのか」

岸：少し時間も進んでいますが、ここからはクロストークの形で、何度もできてきているテーマ「なぜ、アフリカなのか？どんな意義があるのか？」といったところを掘り下げていければと思います。視点としては、大会にとって、参加者にとって、あるいはアフリカの人々にとってというところがあるかと思います。まずは関わったメンバーから、どのように思われたかを伺えればと思います。

皆さんにご協力いただいてアンケート調査をしたいと思います。スマホはお手元にありますか？
www.menti.com で調べていただけますでしょうか？ コードは「49951936」を入力いただくと、二問質問が出てくると思います。画面を切り替えます。mentiで調べて49951936。はい、ありがとうございます。ここに、アフリカにはどんなイメージがあるかということをごんごん入れてください。身体能力が高い・明るくてパワフル・人間らしさ、ありがとうございます、9人の方。自然的なイメージが強いんですかね。先ほど一番初めに質問した時にも、実際に行った事はないという方が多かったですし、なかなかイメージしにくいのかなと思います。

では次の質問です。日本でのスポーツ大会でアフリカ交流を実施する意義は何だと思いますか？

特に今回参加いただいた方や運営メンバーがどのように思われたかというところを聞いてみたいですね。これはまた入力いただいているものを、のちほど見にこられればと思います。では、それはいただきつつ、先に進みたいと思います。

今回の大会でのアフリカチャレンジの実施体制は、こんな形でした。神戸アスリートタウンクラブとフットサルフェスタ、A-GOALとCHEZAが中心になりまして、ウガンダ側ではSOLTILO Bright StarsとJICAウガンダさん、UGANDA EMPOWERSさんの三者。そして日本側ではpa mojaさん、サロン2002、Laudiっていう形で協力いただき実施してきました。

本多さんからフットサルフェスタの話をしていただき、私は東京に住んでいますが、神戸だし、スポーツだしっていうのを聞いた時に、真っ先に思い浮かんだのがCHEZAさんでした。教育とスポーツを通

して、日本とアフリカで人材を育成し、両国の架け橋になるという活動をしている CHEZA さんにお声かけをさせていただきました。先ほど半井さんにお話しいただいたので、次は雨宮さんにお伺いしたいと思います。

雨宮さん、今回実施されてどんな意義があったかなっていうふうに思いますか？

雨宮：そうですね、私たちはもともとアフリカで長く活動していて、アフリカで起業、アフリカのために活動、あるいはアフリカで事業をするということをやってきました。その中で、どちらかというところから「なぜスポーツなのか」みたいな問いに向き合ってきた時間が長く、やはりスポーツは本当に共通言語だなあっていうのは思っています。現地で活動していても、本当に国籍や民族や言語の違いを超えて、サッカーで言えばボール一つあれば言葉も通じない人たちがつながり合えるっていう最強のツールだなというところを強く感じていました。

今回、本多さんからのお題と言いますか、「なぜアフリカなのか？」という、いままであまり考えてこなかった、スポーツ×アフリカの、「なぜアフリカなのか？」ということを問われて、12月から悶々とずっと考えていました。一言でピシッとと言える答えがなかなか出ないんですけども、アフリカを語るときにあえて一言で言うなら、やっぱり「ポテンシャルの高さ」かなと感じています。ポテンシャルの中には二つあって、一つは市場マーケットとして非常にポテンシャルが大きいということです。2050年には世界人口の四人に一人がアフリカ人になるという人口予測もありますし、貧困のイメージがあるアフリカですけども、みんながスマホを持っていて、電子決済とかウーバーイーツとか、日本よりすすんでいる部分もあったりして、今後本当にビジネスとしても、日本人も目を向けていかないといけない国・大陸である場所だなっていうのは一つあります。

二つ目のポテンシャルとしては、いまアフリカのイメージというところにもありましたけれども、身体能力のポテンシャルだと思います。やっぱり本当に身体能力、高いポテンシャルを持っているところで、環境が整えば、今後スポーツ界でもアフリカ人が席卷していくんじゃないかなと私自身は思っています。なので、アフリカ人が本当に身体能力が高いのかというところも、あくまでイメージでしかないの、これをみんなで実証実験するわけじゃないですけども、運動能力測定を通じて彼らの身体能力に触れ合っていける面白さはあると思います。

スポーツという共通言語を日本のお子さんから大人まで、一人ひとりすごい身近に感じることができるスポーツで、遠い場所ではあるけれども、これからポテンシャルの高いアフリカに人と人がつながっていけるっていう、そういうプラットフォームになっていければなと思っています。

岸：ありがとうございました。いまおっしゃっていただいたことは、いまだから考えられるんですけども、実際11月ぐらいにCHEZAさんとA-GOALと本多さんと相談していた時、何をやるかというのはなかなか難しかったです。フットサルの参加者にとってアフリカって遠いし、寄付といっても、ゴールした人が寄付をする形が本当にいいのかとか、よくわからない所に寄付するのもどうなんだろうみたいなこととか、いろいろもやもやとしていたんです。

私の中で「繋がる」という部分に舵をきって今回実施した背景には、このミーティングが大きかったと思っています。JICAウガンダさんとのミーティングです。JICAさんは各国に事務所がありまして、その中のウガンダです。JICAウガンダさんからA-GOALに、何か一緒に活動ができないかというご連絡をいただき、ミーティングを開きました。その時のミーティングで、モノや寄付も嬉しいけど、やっぱりつながりを感じてもらえる機会を作ることって大事だよなっていうような話が、ちょうどフットサルフェスタの前ぐらいにあって、そうだなあと思い、フットサルフェスタでもこの路線でいこうと考えたのがあります。

内山さん、聞こえますか？ お待たせしました。まず A-GOAL にお声がけいただいたきっかけやパートナーシップのところも含めてお話しいただいてもいいですか？

内山：はい、ありがとうございます。われわれウガンダでいろいろやっているんですけども、やっぱり日本の方々と繋げていきたいなあっていうのを強く思ったところがあります。さっきも皆さんなんでアフリカなのって結構…

岸：ちょっとネットワークが不安定なようですが、内山さんは JICA ウガンダ事務所の所長さんです。ご連絡をいただいたきっかけが、JICA さんと、先ほど榎田さん・大場さんの bright starts が業務提携パートナーシップ協定を結んだというものでした。実は JICA としては初めてのサッカークラブとのパートナーシップを結んだっていうところがありました。あ、おかえりなさい。

内山：すみません。

岸：いえいえ。やっぱり JICA ウガンダさんとして、スポーツに感じる力とか、国際協力においてやっぱりスポーツ、Bright Stars とパートナーシップまで結んで、しかも日本とつながりながらやろうとしている動機みたいなところをお話いただけますか？

内山：はい、我々色々な国で国際協力をやっています。アフリカ、アジア、中南米でやっていますが、やっぱりいつも思うのは、いろんな条件とかあるんですけども、やっぱりやる気がないと成功しないですね。何も。この国を良くしたいと思う気持ち、もしくは成長したいと思う気持ちが本当に大事だなと感じています。SOLTILO の本田選手が言っていたんですけども、やっぱり夢を持つことの大切さ、夢を持つことで、モチベーションが湧いてくる。まさに我々 JICA としても…

岸：大事なところで落ちてしまいますね。JICA としてはっていうところ。ちょっとこの間、同じウガンダからの視点というところで榎田さんにも伺ってもいいですかね。こうやって日本のスポーツイベントでウガンダとつないで、あるいはアフリカとつないでやるっていうところを、アフリカ側から見るとどんな意義があるとお感じですか？

榎田：やっぱり日本とアフリカの距離を考えると、日本からは「どこ？」って感じの人も多いと思うんです。チャイナチャイナと言って、結構アジアでは中国人と見られがち。「俺はジャパンよ」って言っても、うん、そうか、なんか YAMAHA とか車関係のことはわかるけど、他は全然知らへんみたいな感じのことが多いかなと感じます。

岸：そういったイメージがこういう活動を通して変わっていくってところですかね。

榎田：そうですね。うちのチームは、JICA さんもそうなんですけど、日系のスポンサーで、僕らのチームは、日本のことをやっぱり知ってくれていると思います。でも、ほかのチームに行ったらと思うと、たぶんそれはまた日本のことをあまり知らないんじゃないかなと思います。

岸：なるほど、ありがとうございます。ここでは、それこそアフリカで生まれたのはフライデーさんしかいらっしやなくて、みんな始めはアフリカは遠い国だったし、知らない中で、たぶんなぜアフリカへ行くんだろうみたいなのところって、それぞれが感じているところかなと思います。

アフリカに行っていた方からもう少しお話を伺いたいと思います。じゃあ、さやかさん、pamojaの彩さんからもいいですか？

棚原：はい。ご質問ありがとうございます。難しい質問ですよ。なぜアフリカなのかっていうところですけど、私が思うのは、アフリカチャレンジとかで、日本にいる子供たちが一度でもフライデーさんを見たりして、アフリカの方と少しでも触れ合ったその瞬間に、ちょっとでも将来の選択肢が増えるんじゃないかなっていうのを感じました。もう一つは、アフリカに行って、先ほど榎田さんがおっしゃっていたみたいに、やっぱり日本の事がまだ知られてない中で、「僕、日本の人と昔喋ったことがあるよ」っていう生徒が一人でもいたり、大人が一人でも言っていたら、私たちすごく嬉しいですよ。なので、そういう場を作っていくのが、せっかくアフリカと繋がった私たちがやるべきことなんじゃないかなと思いました。ありがとうございます。

岸：ありがとうございます。さやかさんは pamoja っていうメーカーでスポーツウェアを通じて、アフリカとつながろうっていう活動をしていらっしゃるんですね。

棚原：はいそうです。私の場合は、スポーツウェアでその角度から入って来られた方にアフリカを知ってもらったらいいなと思っています。

岸：ありがとうございます。では川崎さんからも。先ほどもひと言いただきましたが。

川崎：そうですね。ぶっちゃけアフリカじゃなくてもいいんじゃないかっていう半井さんの言葉から思うことは、逆に言えば、日本国内でいうとアフリカとつながっている日本人は少ないはずなので、そこに私はすごい魅力を感じています。それが一つと、何事も国際理解っていうのは経験ベースだと思います。私も実際に現場に立って思うことがあるんですが、いくら教室の中で国際理解って大事だよとか、人から言われてやるのではなく、実際に、前回のイベントではフライデーさんが会場にいたわけですが、フライデーとしゃべってみたという経験が、いつか何かになるっていうのを積み重ねていくことに意義を感じました。人間って経験ベースで学ぶ生き物だと僕自身思っています。この意義としては、場づくり。そこに集まった人達がどう行動を起こしていくかというロールモデルを作っていけばいいのかなと思います。特に若い世代、子供たちにこういう場を作ることは、教室の中でSDGsの話をいこうしようが知ったこっちゃない。僕自身、現場での体験がほとんどだと思うんです。そんな中で、いやもうそういうのは一旦置いて、一緒にスポーツしましょう。流れる汗は一緒です。けがしたら出る血も一緒です。人間だよっていうところに気づくイベントにできるのかなと感じました。

一回目の様子を映像で撮っていても、それは可能性として多く感じました。どこをどうブッシュして行くか。アフリカである必要は確かにないのかもしれないかもしれませんが、見た目、住環境、今まで追ってきた歴史、明らかに日本とはかけ離れているので、アフリカの人たちと交流ができればヨーロッパ、アジアなんかわけないんじゃないかって僕自身思うので、そういう捉え方もいいのかなと思います。

あまりこだわりすぎずに、しょっぱなから、アフリカっていうのが素晴らしいと思うので、私自身もウガンダにいたことがあるので、今後ともサポートさせていただければなという感じですね。それが編集しながら私もずっと悶々と考えたことの一つです。まとまらないけど、以上です。

岸：ありがとうございます。SDGsを教室でいくら勉強してもっていうのはすごいインパクトあるところだと思います。実際、アフリカに行ったことないけど、運営とか参加に関わっていただいたところで、森口さん、声出せますか。

森口：はい。ありがとうございます。森口ことみと申します。アフリカには直接的には関係はないんですけども、先ほど紹介があった浜野君の大学の同級生です。今はもう卒業して社会人で、輸出・輸入関係をやっています。

今回はフットサルフェスタの方でボランティアをさせていただきましたが、自分としてはやはりアフリカってというのはメディアでしか見れないものなので、実際行った方と話せるのはすごく貴重な経験、体験になると感じています。子供たちを見ているとやはり、スポーツで通じ合える部分が多くあったので、これからもこういう体験であったりプロジェクトはすごく貴重だと思っています。これからもスポーツにずっと携わってみたいと感じたので、どうぞよろしくをお願いします。

岸：ありがとうございます。今回大学生、専門学校生に、運営でお手伝いいただきました。西村さん、学生からみてどうでしたか？ それこそ学生にとっては何も知らない中で手伝えと言われ、手伝ったところからスタートしていると思いますが、学生からの感想とか何か聞かれていますか？

西村：振られるかなと思っていろいろ考えていたのですが、まだまだスポーツの場に出たこともないような、どうしようもないやつらが集まるスポーツの専門学校なんですけども、すごくいろんな刺激をもらったはずです。最近の若いやつらは自分の考えを人に知られるのが恥ずかしいと思うのでなかなか感想を言わないんですけど、いろんなことをすごい感じたはずで、僕のところにどうしようもないやつらが寄ってくるようになりました。学校から悪い奴らを「西村先生、どうやって仲良くなってらんですか？」って聞かれるぐらいのものでした。すごく良い体験をさせてもらったと思うので、それをどこかで言語化して、フィードバックしたいと思っています。

岸：ありがとうございます。もう一人教育的なところの視点から、嶋崎先生。現場にも来ていただいて、2日目の参加者が少なかったんですが、お考えがあればぜひお願いします。

嶋崎：はい、ありがとうございます。サロン 2002 の理事をさせて頂いております嶋崎と申します。現在は国際武道大学で教員をさせて頂いています。私、高校で長らく教員をしていたもので、どうしても子供たち目線で考えてしまうんですけども、さっき SDGs の話を教室でも響かないっていう発言がありました。まさにその通りでして、やりますけれどもあまり響いてないなって僕は感じながらいつもそういう話をしていました。特に、最近の子供たちは情報の取り方がスマホですよ。スマホでは、自分の興味ある情報しか取らなくなる。そうすると、もうアフリカなんていうところにたどり着くのは、ほぼないと思うんですよ。そういう意味では、こういうスポーツイベントでアフリカとコラボした企画をやっていて、そこで体験したり見たり、アフリカの方とお話しをしたり、そういうことを通してアフリカってなに？ アフリカってどこよ？ アフリカちょっと行ってみたいなーという刺激が得られればものすごくいいと思うんです。みんながみんなそうならなくても、一人でも二人でもそういう子が出てきたら輪が広がっていくと思うので、そういう意味ではこういうスポーツイベントなどいろんなイベントでアフリカと繋がっていく経験を子供達にさせていくことは大事ではないかなと考えました。

たった一日ですけど参加をさせて頂いて、私も新たな発見があり、とても勉強になりました。皆さん本当にお世話になりました。ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。子供たちもアフリカに関わるつもりはなかったけど、あそこに来てみると、フライデーさんはいるし、中継でいきなりしゃべられるし、向こうから挨拶されるし、みたいなシチュエーションが、自分から行くんじゃなくて与えられる感じがすごくいいんだなって、今の話を伺って思いました。フライデーさんは、改めて子供達と関わってみてどうでしたか？

フライデー：すごかったのは、子供たちはそんなにアフリカ人と会ったことなかった子もいました。だから、子供たちから、どんな人か、どんなところ、どんな国、どこから来ましたか？と聞こえたら、「アフリカだよ。」っていいます。でも、アフリカの中でも、アフリカの国々もいっぱいあるんですよ。私がザンビアから来ましたと言うと、「そう、ザンビアってどこ？アフリカなの？」っていうふうになんかすごい興味を持ちちゃう、それはなんかこういう繋がればいいなと思いました。私がそれを見て本気で、スポーツと繋がってこういう風な繋がりが必要なんだなあと思いました。

岸：ありがとうございます。本当ですよ。先程のアンケートにその後も入力された方がいらっしやって、共有させていただくとこんな感じですね。「国単位でアフリカを知る」と、「本当アフリカって一握りだけど、その中でもザンビアがあってね」とかいうところって、やっぱり関わってみて見えてところなのかなって思います。はい、皆さん、ありがとうございます。「子供がオンラインでやり取りしてる素晴らしかった」とか、今だからこそできるようなところもあると思います。

時間もだいぶなくなりました。参加者のみなさんとのやり取りは。この後の懇親会でもできたらなと思いますけど、ちょっとだけ。今後どうやってこの企画を広げて行ったり、維持したりできるのかというところ。そこについてご意見ある方からいただければと思います。当日来られていない方も含めて、何かアイデアがあればお願いします。今日はホンダさんがいっぱいいらっしやるんですが、Dreamerの本田さん、こんにちは。

本田：どうも、こんにちは本田です。どのホンダやね感が半端なくて、さっきからずっとホンダと言われるたびにドキドキしたんですけど、すみません、また本田です。よろしくお願いします。

岸：よろしくお願いします。当日は来て頂いてなかったですけど、本田さんも神戸出身ですよ。

本田：そうなんです。神戸生まれの神戸育ちで、神戸っ子なんですけど、東京へ来て15年ぐらいなので、恥ずかしながら東京では江戸っ子のふりしています。すみません、よろしくお願いします。

岸：アフリカチャレンジとフットサルフェスタの話聞かれて、今後どう活動・行動していったらいいかなど、本田さんの活動も含めてちょっとお話いただけますか？ ありがとうございます。

本田：SDGsっていうキーワードがやっぱり出てきたんですけど、高校生たちにSDGsの授業をしてもなかなか聞く耳を持ってくれない。SDGsっていうキーワードは知ってるけど、他人事なんですよ。それを自分ごとにしらないことには持続可能なんて無理なんです。教えることは教わることやし、助けることは助けられることやしっていうところ、信頼のキャッチボールをいかにしていくかというのは、たぶんSDGsの持続可能に繋がるためのエネルギーになるんじゃないかと僕は常々思っています。やっぱりスポーツって必要なんだと。ただね、すごく大切なことは、スポーツだけが素晴らしいじゃなくて、文化活動全部素晴らしいなと思ってるんですよ。文化ってなんやねんて言うのと、人間の夢を膨らます、仕組み・方法が文化であって、夢を膨らます方法として文化っていう、スポーツっていう

のがありますよということだと思います。僕はずっとスポーツしか知らない男なんで、やっぱりスポーツを軸に、日本の夢をふくらまして行きたいなというところなんです。志を高めさせる材料として僕は、アフリカってめちゃめちゃよくてですね、関わる必要なく、日本に住んで関わる必要もないっていう声も多いんですけども、でもアフリカを知ることによって、自分の志が高まるような材料の提供を、大人が子供に子供が大人に伝えあえるような社会になってくるといいなと思います。本当に日本の教育は、みんな一緒にみんな良いいっていう教えの中で育てているんですけど、年年、年年、失敗を重ねながら大人になるにつれ、みんな違ってみんなええやんって思うような形になってくる。その中でもみんな違ってみんないいっていうところを、スポーツを通して感じるような仕組みができればいいのと感じています。話し足りない部分もあるんですけど、喋り出すとキリがないので、これでやめようと思います。お呼びいただきありがとうございます。

岸：ありがとうございます。そうですね、別にスポーツじゃなくてもいいですよ。だけど、スポーツでもいいっていうか、スポーツがツールになるっていうところもあるかなと思います。他にも聞いていただいている小松章一さん、急ですけども、感想とかあればお願いします。質問でも結構です。何かあれば、お願いします。

小松：今まで、オリンピックとかラグビーのワールドカップなど、大きなスポーツイベントを通じて国を知る機会はかなりあったんです。でもやっぱり時間がかなり限られて、細かいところはなかなか見られない。でも今回のこういった試みは、お互い本当に草の根で、こういうことをやってるんだ、こういう環境なんだというのを垣間見ることができます。こういう機会が今後も広まればいいなと思います。また、フットサルを選んだのも、チームスポーツ・団体スポーツを選んだのが、やっぱり個人単位ではなくて、仲間何かをやるということを通じて、お互いの繋がりを深めるという点でよかったんじゃないかなと思います。

岸：ありがとうございます。そういう意味で親和性も高いかもしれないですね。大澤さんにも伺ってもよろしいですか？サンスポ大澤さん。

大澤：初めまして。僕の子供が賀川さんが作られた神戸FCでプレイしたことがあるんですけども、その時にチームメイトの子がアフリカのケニアに、お父さんの仕事の都合で転勤されたことがありました。向こう行かれたらやっぱり靴がない、ボールもない。ということで、例えばチームメイトのいらなくなった靴とか、ちょっと痛んでいるボールとかでいいから送ってくれという話になって、いろんな声だけですごい集まりました。さっきの話を聞いてみると、フットサル大会とアフリカを結びつけるのは難しいとかいろいろあると思うんですけど、あまり深く考えずに、「こういうことを知ってもらいたいんや」という思いがあればいいと思うんです。

さっきのお話にもありましたけど、なかなか今の子って、うちの子もそうですけど、スマホばかり見てて、自分の好きな事以外興味ないことであって、やっぱり大人が伝えたい事があれば、「こういうことをやりたいんや」というのがあれば、それでいいと思うんです。それをやることによって、例えば子供の靴がアフリカのケニアに届いて、その靴を履いている子供の写真が送られたりして、「ああ僕が使った靴がアフリカで、こんなに喜ばれて使われているんだ」とかいうのが子供にも返ってきて、すごい意義があったと思うんです。それがどう繋がっていくかわからないですけど、きっかけを与えることだけでも意義がある。これでやらなあかんと考え出すとなかなか難しいので、こういうことやりたいよというのがあれば、やればよい。意義があることになるんじゃないかと思って話を聞いておりました。

岸：ありがとうございます。ある意味そういうパッションは割とアフリカ行っていたメンバーは強いかもしれないですね。内山さん、復活されましたか？

内山：はいすみません。

岸：いえいえ。何か今後に向けて、こんなふうにしていけばいいんじゃないとか、何かあればご意見いただけますか？

内山：アフリカと日本をどんどんつなげていきたいと思っています。二つ理由があって、一つは損得抜きで、面白いと思うんですね。進撃の巨人というアニメで、オニャンコポンっていう黒人のキャラクターがいるんですけど、彼に主要キャラクターがなんで肌が黒いんだって聞いたら、彼は「いやいろんな奴がいた方が面白いからでしょ」というお話をして、やっぱり色んな人と関係を持つ、多様性を感じるのが理屈抜きに面白いと思うし、知ってる文化、アジアとかヨーロッパとかアメリカだけと付き合うのではなく、知らない人たちと付き合うのは日本にとって大事なんじゃないかというのがあります。もう一つは損得の話で、SDGの話がありましたけど、日本は世界で一番平均年齢が高く、いま48歳。サステナブルじゃないんですね。みな安心してるとは思いますが、日本の社会とか経済とかサステナブルじゃなくて、日本がこれから文化的な生活を維持していくためには、アフリカみたいな若い人たちと一緒に生きていくしかないと思っています。ウガンダの平均年齢は24歳、中国は39歳、日本48歳。なので、どうぞアフリカと触れ合って関心持って、アフリカの若さと一緒に、イノベーションもすごいので、PCRテストもWhat's upで結果出ますし、ワクチン証明書もQRコードがついていて、日本のほうが全然遅れちゃっているような世界もあります。そういった思いで我々としては、アフリカと日本を繋げていきたいなと思っている次第です。すみません、何度も繋いでもらって恐縮です。

岸：ありがとうございます。いや、本当にそういうちょっと進んでいる部分のアフリカって知らなかったりすると思いますし、違いのある人と出会うと違いが当たり前になるし、自分が人と違う部分も受け入れられるようになってきたりするところもあるのかなと思います。

ということで、9時になってきましたので、まとめの方に入りたいと思います。

今回映像を作っていただいた川崎さんは、国際協力×映像のようなことをされています。こんな形で実施しまして、このアフリカチャレンジ、今後はぜひ47都道府県とアフリカをつなげていきたいと思っていますので、サポーターとしてご協力頂ける方がいらっしゃいましたら引き続きよろしく願いいたします。

実際、これまらやる場所がいくつか決まっています。一つは3月6日に豊中です。とよなかシティマラソン。コロナでどうなるか不安なところではありますが、ここで実施しようと考えています。もう一つが神戸の神戸ユニバーリレーマラソン。もともと2月末に予定していたものが3月に延期になって、ここでも実施しようと思っています。というところで、ご協力頂ける方がいらっしゃいましたら、現場でのご協力もそうですし、運営資金というところも一つのネックになりますので、そういった面でもご協力いただければお願いします。

では最後に、すごく現場でご協力いただいた半井さんにもう一言いただき、本多さんに最後してもらおう感じでいいですかね。半井さん、今の議論も踏まえてお願いします。

半井：すごく勉強になる、改めて考え直す機会をいただき、本当にありがとうございました。やっぱり今日お話していて、いろいろ皆さん、感じられたこととか考えられることはあると思うんですけども、一つは今回、アフリカという、我々としては魅力がある土地であって、それをぜひいろんな方に知ってもらいたいという思いで始めたプロジェクトで、それに反応していただける方がいらっしやったことが本当にありがたいなど改めて感じました。こういった活動を引き続き継続していきますので、またいろんな形でご一緒していただける機会がありましたら大変ありがたいです。どうもありがとうございました。

岸：ありがとうございます。私もこんなに皆さんと一緒にできて、多分寄付したらそれで終わりになっちゃうかもしれないですけど、またここで人とつながると次がまた生まれたりということもあるなあとと思っています。では本多さん、じっくりきましたでしょうか？ はじめに、なぜアフリカなのかというところが本多さんご自身もじっくりきてないと言っておられましたが、いまの心境はいかがですか？

本多：ありがとうございます。最初にちょっと偉そうに、挑発的に、「なんでアフリカなんや」っていうところをスポーツ側からの立場というような意味もあってお話させていただきましたけども、僕自身は神戸でやったときに、当日子供たちがオンラインで交流している姿やフライデーさんが子供たちと一緒に交流している姿を見て、「あ、これはすごいことになってるな」というように感じました。僕は中学生の時の英語の先生がアメリカ人だったんですけども、最初とにかくその先生と接する事が怖かったし、近づきたくなかったけれども、その先生と接することで、外国人や、英語に対して抵抗感がなくなってきました。だから今回、子供たちにそういう経験させてあげられて、すごいことができたなと思っています。

スポーツ側からの話ということでは、日本の平均年齢を着々と上げていらっしやる日本最年長のサッカーライター賀川浩さんの後輩である本郷さん、川崎さん、大澤さんも参加していただけてますけど、一番サッカーを知っていて、一番サッカーを愛している賀川さんが、「サッカーなんてただ四角い枠の中に丸いボールをただポンって蹴り込むアホらしい遊びや」っていう話をするんですよね。あほらしいものだからこそ、アフリカとも一緒にやれるし、そういう人たちと交流するツールとしては、そんなアホらしいツールが最高のツールかもしれないなということを改めて感じています。

今後、いろんな形でこの活動を続けてきたいと思いますし、皆さんからも「ようやくアフリカの事が分かったか」ってどんどん挑発してほしいと思います。一緒に高めていきたいと思います。ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。そうですね。アフリカと関わることによって、スポーツの良さみたいなところも見えてきたりするのかもしれない。ということで、まだお話をいただけなかった方や突然振ってしまった方とかもいらっしやって申し訳なかったですが、9時を過ぎています。榎田さん、ウガンダだと何時ですか？

榎田：いま3時です。

岸：ちなみにちょっと最後に一つだけ伺いたいんですけど、榎田さんはなぜウガンダでプレイしようと思ったんですか。

榎田：やっぱりアフリカの大陸に行ったことなかったんで、興味あったのと、挑戦という形でいきました。

岸：なるほど。ありがとうございます。まさに、国際協力の相手ではなく挑戦の相手だという事で、またアフリカと関わっていければなと思います。

榎田：またイベント等あれば、SOLTILO Bright Stars に言ってもらえれば、僕から選手たちにも繋げられるんで、よろしくお願いします。

岸：はい、ありがとうございます。大変心強いです。引き続きよろしくお願いします。
じゃあここで主催の中塚さんに司会をお返しします。

中塚：まずはみんなで写真撮りませんか？

岸：じゃ画面オンにできる方はオンにしてください。アフリカの A を。SNS とかでダメな方いらっしゃったらコメントでいただければうまく外しておきますので、よろしくお願いします。

中塚：どうもありがとうございました。非常に可能性のある話が広がっていったと思います。全体を総括するわけじゃないんですけど、結局何でもいような気はするんですよね、面白いことであれば。そして、面白いなと思ってこんなに人が集まっているわけだから、集まった人たちでまたつながっていけばいいなと。その一つのきっかけが今日の場合なのだという気がしています。

本当にどうもありがとうございました。こんな会をサロン 2002 で毎月やっていますので、ぜひ今後ともよろしくお願いします。